

幹部足る心構え（前編）

序説

当たり前は、努力の結果得るもの。

（ペンで円を素手で描くのは大変な訓練が要る。）

当たり前の生活には、大変な努力が要る。

そのものを「ありのままに見る」＝「観る」ということ。

心が曇っていると、ありのままに見えない。

欲がある、思惑がある。だから、ありのままを、

ありのままに見ることが出来ない。

白木は放って置くと色が変わる。

毎日、絹布のようなもので磨かないと変色する。

幹部が部下に接する時「真実と事実」を混同して貰っては困る。

一つの実事（この実事を裏付ける真実を捉えていない）を

実事として捉える。

何故、こういうことが起きたかという実事（真実）を支えている

もの。

各々まちまち、真実を見極める前に、事実を我流で解決したり、
事実の上に意見を加えたりしてしまう。

要領の良さ、テクニックで世渡りが出来るものではない。

人が人に尊敬の念を持つか否かは、飽くまでその人の人格に対して
持つもの。

技術技能に対して、尊敬の念を持つ訳ではない。

技術技能は、永久に付いて行ける人ではなくなっていく。

幹部足る者は、己の人格を磨くこと。

それには「当たり前のことを当たり前に行えること。」

当たり前である為の努力と、ありのままを見る為の努力をしなければ
ならない。

曇れる心を無くし、努力に努力を重ねること。

大人と子供の違いは、子供の時期から、訓練に訓練を重ねて、
当たり前を当たり前として確実に出来るか否か、である。

1. 幹部は社長の分身としての地位に居る者。

前提として、会社が明確に基本方針を打ち出しているのか、どうか。

会社の基本方針を耳で聞いた。だから自分は分かっている。

という単純なものではない。

何度も何度も反芻し、考え直してみても、初めて理解が出来るもの。

しかし、それでも自分が経験しないことは、理解出来ないのが、世の中の一般（普通）である。

自分が知っているつもりのことでも、それを他人に教えてみて、相手が納得してくれる。

それで初めて、自分の知識がこういうものだったのか、という真の理解ということが生じて来るものである。

まず、会社の基本方針が打ち出されているか、どうか。

その基本方針を理解体得する為に、どれだけの努力をしているのか、どうか。体得とは、自分の肌身に、ひしひしと感じる、ということ。

自分にとって都合の良いことは理解するが、自分にとって都合の悪いことは出来るだけ、当たらず触らずに通そうとするものが、世の中の一般（普通）だから、そこに陥らないように自分を律し、努力を積み重ねなければならない。

社長には、社会観、人生観が無ければならない。

「会社は、こうあるべきだ。」という願望があるはず。

分身は、社長の願望、願いが幹部の願望、願いとなっていることが前提である。

社長の喜び悲しみ＝私の喜び悲しみ。

これが成り立っていなければ「生きている」とは言えない。

まさに、家庭に於ける親子関係と同じ。

何を重点管理し、経営上から着手し、どこに力点を置いて行動

しようとしているのか。を価値判断し、利潤につながること。

(利潤だけに限定されるものでもない)

会社の名誉、信用を固め、会社の永遠性に対し、プラスとなる行為であるか、どうか。

価値とは「会社の信用を高める」ということ。

お互いの理解を常に反復し、自らに言い聞かせ続けることをしない限り、人間はともすれば、忘れてしまうものであるから。

努力に努力を重ねている間だけ、白木は白木であるのである。

だから、周知徹底が大事。

自覚を高める為に、反復し続けること。

これが、体得につながっている。

会社（組織）は、一つの秩序の下になければならない。

この秩序とは「上下本末の自覚」のこと。

その前に、上下本末の事実がなければならぬ。

上に立つべき者、下にあるべき者をどうしなければならないのか、
という「道」を呼ぶのである。

自覚は、して良いこと、悪いことという「道」を生む。

ということは、人から言われた強制は何らの道ではない。

自らが自覚の世界に居て、初めて道を生むということが生じて来る。

上にあるべき者の任務、下にあるべき者の任務、中間にあるべき者
の任務が明確に行われ、社長から権限として委嘱され、

全うすべき任務として与えられている。

これが、管理者としての任務の自覚である。

2. 結果に対して責任を取る。

社会的任務を果たしていること。

まずは、生活保障の基盤が大切。営利事業としての業績を上げること
が前提。「結果が良ければ全て良し」

責任を取るという言葉は、プロセスに責任を取る、

ということは無く、結果に対して責任を取る、ということ。

努力する過程も大事だが努力には実を結ばない努力も在る。

集団社会の営利事業に居る限りは、実の結ぶ努力であってもらわないと皆が迷惑する。

* 集団社会は、秩序と運命共同体の中に存在するもの。

人格を有する人は、自らの行為に責任の取れる人であり、責任を伴わない行動は、動物の世界である。

常に責任の所在が明確でないのは、却って秩序の混乱を招くことになる。

業績向上しない原因、不始末の結果の出处は、結果に対して責任を取るもの。

自分の行動には、責任を取らなければならない。

世の中は流動的なもの（諸行無常）だから新しい世相の動き、国内外の情勢、同業者の動き得意先の動向、こういうものの情報の取り組みがなければ方針の立てようがない。

様々な部門を管理する幹部達が、手足の如く、情報を持ち寄る。

そして、事実報告をしてくれない限り、社長としての方針の決定の仕様がなない。

これが、幹部社員としての第二の任務である。

幹部足る者の第一の任務は、社長の考えや態度を理解すること。

第二の任務は、社長に判断を誤らせないように、情報の提供者足ること。

大事なことは、幹部の責任の果たし方である。

与えられた極限の中で、与えられた力を発揮すると共に、担当全体に対して、堂々と意見を具申すること。